

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.27 No.8 August 2026

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

8

CONTENTS

・巻頭言

「元初まりの話」の読まれ方・その5
／井上 昭洋 1

・英語文献にみる天理教 (17)

『Japan To-Day (現時の日本)』(4)
／尾上 貴行 2

・音のちから—中国古代の人と音楽 (33)

逸話を通して見る音の世界—長安市東市の琵琶の腕くらべ—
／中 純子 3

・ブラジルの宗教的風景 (15)

アンテペラム期の米国系プロテスタント教会による布教活動⑨
／中西 光一 4

・熊本地震と私—災害支援に学んだこと (新連載)

はじめに
／茶木谷 吉信 5

・2026 年度公開教学講座：布教伝道と伝道学 (2)

第2講：異文化伝道論1—イスラームの宣教活動に学ぶ
／澤井 真 6

・おやさと研究所ニュース 7

第387回研究報告会(5月14日)／
第388回研究報告会(6月29日)／
連載執筆のねらいと執筆者紹介／
2026年度公開教学講座のご案内

巻頭言

「元初まりの話」の読まれ方・その5

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

アニミズムとは、一般に、自然界の様々な事物に靈魂や精霊の存在を認め、それら霊的存在を信仰することとされる。文化人類学者の岩田慶治は、宗教の起源と捉えられてきたこのアニミズムについて独自の理論を提唱した。すなわち、それを宗教的な思考体系として外側から分析するのではなく、人間が世界と直接触れ合う体験の中に見えてくるものとして内側から捉え直そうとしたのである。岩田にとって「元の理(元初まりの話)」は、そのような体験を想起させるテキストであった。

おそらく「元の理」を題材に自由に語ったのだろう。彼の論考は、行儀良く正面から「元初まりの話」を考察するというより、このテキストに触発されつつ、彼のアニミズム論を自由闊達に展開しながら、思うところを述べたもののように感じられる。「元初まりの話」は人間が生まれる以前の、世界が未だ混沌とした状態から始まる創世説話である。人間と草木虫魚が未だ分かれていない場所への眼差し、主客未分への志向といった岩田の思想の核心が「元の理」の世界観と共鳴し、彼はそれをアニミズムの世界から捉え返してみせたのである。

岩田は、教祖の説いた「元初まりの話」は大和の農民のおばあさんが「この世の中は、こうして始まったんだよ」と孫たちに説いて聞かせるようなお話だと、さらりと述べる。この説話を聞いて、孫たちは身近なドジョウを通して人間の誕生について思いを巡らす。世界の創造という大きな問題について、子供にも分かるように素朴に語られた説話というわけだ。

岩田の目には、大和の人である教祖であれば、昔の古典にならって国土の豊かさを説いても良かったはずなのに、魚ばかり出てくる泥海の世界を語っていることが不思議に映る。岩田は、「元初まりの話」に水中の動物が出てくるのは、名前のついた事物では表現

しつくせないもの、水の底、深層の世界があったからではないかと考える。名前のつかない生き物の方が、この世界の由来を本当に語っているというのである。教祖は子供たちにも分かりやすいように、生き物に名前をつけて話をしたもの、名前がつく以前の世界を見ていたと岩田は捉える。

彼は、「何千年前、何万年前と昨日、今日とでどこが違うのか」と問いかける。大事なこととは時間の上での昔ではなく、人間の中に流れる源流の所在だと言うのだ。だからこそ、「元の理」というものは「今の理」であり、例えば、朝ご飯の味噌汁の中に見つける生命に満ちた世界—味噌汁を泥海と見立てて見えてくる世界—が「元の理」の「今朝的表現」であり、朝のひとときの「今の理」であるとする。今朝の風景と前日の風景、元の風景というものは、それほど違わないのだと言うのである。

自分というものを現在から過去に遡っていくと誕生の原点に到達するが、岩田はその時に自分を支えたものは何であったかを問う。それは病院のベッドであったかもしれない、人間誕生の原点でそのベッドに当たるものは泥海ではないかと考える。この泥海は常に自分を支えてくれるのであり、泥海と自分は二つで一つであり、それを内側から直感するのがアニミズムの世界だと言う。その直感を生きたのが教祖ではなかったか。教祖は宇宙がごく日常の出来事として瞬間、瞬間に誕生していること、「元の理」が「今の理」として現れていることにいつも立ち会うことができた人であったと岩田は見る。そしてその可能性は私たち一人ひとりに開かれていると話を結ぶ。

[註]

(1) 岩田慶治(1988)「自分からの自由—『元の理』は『今の理』」『G-TEN』第35号、53～68頁。(『講座「元の理」の世界2:「元の理」の象徴学』に再録)

『Japan To-Day (現時の日本)』 (4)

おやさと研究所准教授
尾上 貴行 Takayuki Onoue

前回 (6月号) に引き続き、『Japan To-day』で紹介された天理教に関する記述を見ていく。著者の望月小太郎は、天理教の特徴を概説した後、教祖についてさらに詳しく説明している。まず、生誕から中山家へ嫁ぐまでの経歴を紹介。天理教の開祖は中山みきという女性であり、父・前川半七正信、母・きぬの間に大和国山辺郡三昧田村で生まれた。みきは情に厚く明るい性格で、何事にも器用であったという。13歳で中山家に嫁ぎ、妻としての責務を忠実に果たしたと述べている。

続いて望月は、みきが篤い信仰心によって神と一体となり、天理教の教えを説き始めた経緯を説明する。みきは美德、信心深さ、愛国心によって知られ、世間の慣習や礼節の腐敗を嘆きながら、地域社会の道徳的秩序の回復を願って天地の神々に熱心に祈りを捧げた。こうして徳を積み重ねた結果、やがて神と一体化するに至ったという。1838年、41歳の時、みきは数日間にわたって神に祈り続け、その結果、10月23日に容貌が大きく変化し、目は輝きを帯び、圧倒的な威厳を備えた存在となった。そして周囲の人々に向けて天理教の教えを説き始めた。当初、人々はその言動に懐疑的であり、精神的疾患によるものではないかと考えて耳を傾けようとしなかった。しかし、理路整然とした語り口と、物静かでありながら威厳に満ちた態度には無視できない説得力があった。23日から26日にかけて、みきは圧倒的な熱意をもって教えを説き続けたため、人々は彼女が何らかの霊的な啓示を受けていると信じるようになり、最終的にはその教えに耳を傾けざるを得なくなったと論じている。

さらに望月は、みきが強い信念のもとで布教を続け、最終的に多くの信者を獲得したと述べる。彼女は敵対者からの非難や攻撃にも一人で立ち向かい、揺るぎない熱意と誠実さをもって神の意志に従いながら教えを説き続けた。その活動は50年に及び、やがて信者数は100万人に達したという。そして1887年、90歳で老衰のため亡くなったが、その徳は死後も人々に受け継がれ、信者数はさらに増加した。1908年11月27日には、政府が天理教を独立した神道の一派として認可したと説明している。

そのうえで望月は、天理教は一般的な神道とは異なり、人類救済を目的とする宗教であり、その教義には因果応報や極楽浄土などの仏教的要素が含まれているとの見解を示している。また、信者たちは「くにことたちのみこと」や「くにさづちのみこと」をはじめとする十柱の神々に祈りを捧げ、善行を積むことで蓄積した邪悪の塵埃を取り除くよう教えられているとしている。

続いて望月は、天理教の「聖歌」として、中山新治郎著『天理唱歌』(天理教会本部) から「敬神」、「尊皇」、「愛国」、そして「浄化の歌」として「祓除」を抜粋している。以下に、それらの日本語原文を示す。

廣き世界にありとある 人も獣も草も木も
玉も黄金も神々の 造り給はぬものはなし
造り給ひし神々に 願ひ奉りて後にこそ

如何なる事も人々の 思ふ儘には成るべけれ
神を信仰せぬ者は 人に生れて人ならず
神の救助を願ふには 三ツ子の心に成るがよい
生れし儘の心にて 祈れや祈れ世の為に
救ふは天理の大神ぞ 救ふは天理の大神ぞ (「敬神」より)

神に代りて大君は この国民を子の如く
慈愛みつゝ天が下 治めますこそ賢けれ
この大君は久方の 天つ御神の御裔にて
其の御位は天地と 共に榮えて限りなし
國てふ國に君といふ 君は有れども我国の
君に勝れる君はなし 君に勝れる君はなし (「尊皇」より)

神の造りし日の本は 東の洋の島なれど
氣候中和に地味肥えて 並ぶ國こそなかりけれ
花あり實ある民草の 露の恵に霑ほひて
いや継々に榮ゆ可く 守るぞ神の心なる
神の心を心なる 吾が大君の御稜威にて
御旗の風に靡かざる 國も無き迄成りにけり
其の御心を心にて 身の程々に稼業を
勉め励まむ国民の 家は繁昌するばかり
民の繁栄は國の富 富たる國と成りてこそ
神も悦び給ふらめ 君も悦び給ふらめ (「愛国」より)

神の授けし魂は 曇らぬ玉に異らず
玉に等しき魂を 汚すはやつの埃なり
目に触れ耳に聞く度に 積りに積る塵埃
拂ひ清めて後にこそ 富も誉も授からめ (「祓除」より)

これらの歌詞を紹介した後、望月は天理教が説く八つの穢れとして、greediness (貪欲)、covetousness (強欲)、partial and wicked love (邪愛)、partiality (偏愛)、malice (悪意)、anger (怒り)、evil desires (悪欲)、pride (傲慢) を挙げている。そして、これらを心遣いの否定的側面と位置付ける一方で、肯定的側面として loyalty and filial obedience (忠誠と親孝心)、friendship (友情)、love and obedience (愛情と従順)、faithfulness (信仰心)、love (愛) を紹介している。

さらに望月は、天理教における「清め」の思想は神道の浄化観念に由来し、「穢れ」の概念は仏教の教えに由来すると考察している。また、忠・孝・友・信・仁といった徳目は儒教および日本人固有の倫理観に起源を持つと分析し、天理教は神道・仏教・儒教という三つの宗教的・思想的伝統が融合して成立した宗教であると説明している。

最後に望月は、天理教の組織について次のように言及している。天理教の本部は奈良県山辺郡丹波市町にあり、総本山の長は中山新治郎である。また、全国各地に支部が設置され、2,400人以上の説教師を擁し、信者数は400万人を超える。そして、天理教は日本最大級の宗教宗派の一つであると評価して、天理教に関する記述を締めくくっている。

逸話を通して見る音の世界—長安西市東市の琵琶の腕くらべ—

天理大学国際学部教授
中 純子 Junko Naka

器楽演奏の優劣を競うことは、いつの時代もあったのだろう。唐代の都長安においても、以下のような逸話が、晩唐の段安節の『楽府雜錄』『琵琶』の条にある。

貞元年間(785～804)に、康崑崙という琵琶の第一人者がいた。かつて長安が大旱魃にみまわれて、皇帝は詔を出し、東と西の両市を移して雨乞いをさせた。天門街では、市の人々がさまざまな勝負事を行ったが、音楽の勝負となると、東側では琵琶の腕前が最も優れた康崑崙がいるので、絶対に西側にはこれに敵う者はないと思われていた。そこで康崑崙を彩色された楼台に上げ、新たにアレンジした羽調の「録要」を一曲弾いてもらった。

まず、琵琶の名手康崑崙は、外国人である。康国はサマルカンド(ウズベキスタン共和国の東部)のこと、崑崙はマレーシアやインドネシア方面の総称で、それを合わせたものだからである。雨乞いが行われた天門街とは、承天門街のことであろう。徐松『唐兩京城坊考』には、宮城の南面に開かれた5つの門のうちの真ん中の門が承天門として、「正月元旦と冬至の日の朝会慶典、……あらゆる国々からの朝貢の使節や四夷の来朝者の謁見」(愛宕元訳『唐兩京城坊攷』平凡社 東洋文庫、20頁)が行われていたとある。宮城に南接して役所機関がある皇城があり、承天門街とは、皇城を東と西に分ける大きな通りをいう。徳宗は雨乞いを行う場として、承天門街で東市と西市の人々にさまざまな勝負事をさせた。それを神に見せることが、雨乞いに繋がっていたのであろうか。また皇城からさらに南にある町は、東側と西側とで性格を異にしていたようで、妹尾達彦氏は、9世紀になると「東側の官僚街と西側の庶民街に分かれた2つの異なる上層社会と下層社会が、お互いに芸を披露し合って競争するような状況が生まれてきている」(語り部トーク「古代奈良の『音楽』とシルクロード」『シルクロード学研究叢書』11、2006年、51頁)と述べている。

この東側が琵琶の名手として康崑崙に弾かせた曲は、新たにアレンジした羽調の「録要」であった。この曲は、同音で「六么」とも言われ、白居易の詩のなかにも、「六么・水調 家家に唱い、白雪・梅花 処処に吹く」(「楊柳枝詞八首」その一)とあるように、9世紀前半には流行した曲であった。琵琶の上手による、流行曲をさらにアレンジした演奏、それはすでに東側の勝ちを十分に予見させるものであった。しかし、話は予想外の展開を見せる。

西側は西側で別に楼台を建てたので、東市のものたちは大いにのびた。康崑崙が曲を弾くと、西市の楼台には一人の少女が琵琶を抱いて現れ、「わたくしもこの曲を弾きますが、その調子を楓香調に変えてごらんに入れましょう」とまづ言った。撥を下すや、その音は雷のようで、その素晴らしいは神業であった。康崑崙は驚き、教を請いたいとまで申し出た。そこで少女が衣服を着替えて現れると、実は僧侶であった。たぶん西市の金持ちが莊嚴寺の僧善本に金を出し、東市の勝ちを止めたのであろう。

ここでは、琵琶の音が雷のようだとある。それは素晴らしい音を表現するにはあまり相応しい表現とは言えないが、屋外に多くの聴衆が集まっていることを考えると、みなを黙らせて惹きつけるに十分な音量であったことをいうのであろう。さらに、変調した「楓香調」とは、それ以後流行したらしく、開成3年(838)、唐に渡った藤原貞敏が、揚州にて廉承武から伝授された琵琶譜のうち「琵琶諸調子品一卷」があり、そこには「風香調」「返風香調」などの調名が

みえる。996年ころにはほぼ成立していた『枕草子』の、第203段「弾くものは」には、「琵琶、調べは、風香調、黄鐘調、蘇合の急、鶯の囀りという調べ」とあり、我が国での流行のほどが窺える。さて、話をもどすと、康崑崙に勝る琵琶の弾き手は、少女の出で立ちであったが、実は莊嚴寺の僧侶であった。この寺は、長安の町の南西の隅の永陽坊にあった。隋代に「禪定寺」として建てられたが、その後唐代が始まる武徳元年(618)に「莊嚴寺」と改称された。その伽藍の規模は全国最大級であったようだ(愛宕元訳『唐兩京城坊攷』176頁)。そして、段善本という僧侶の琵琶が、康崑崙に勝ったという結末は、外来楽器として扱われてきた琵琶が、すでに中国人の手中に入り、技術的にも外国人のそれを上回ったということを象徴的に示すとも受け取れるのである。逸話はさらに続く。

翌日、徳宗は僧の段善本を宮中に招き入れ、その藝を披露させ、ことに褒めて奨励し、その藝を康崑崙に教えさせようとした。段善本は、皇帝に申し上げた「まず康崑崙に一曲弾かせてもらいたい」と。崑崙が弾くと、師として康崑崙に言うには、「本領がごちゃごちゃしていて、しかも邪声を帯びている」と。康崑崙が驚いて言うには、「段師匠は神人です。わたしが若くして初めて藝を学んだ際に、偶たま隣の巫女から一品絃調を授けられ、その後何人も師を換えました。段師匠の眼力はこのように玄妙です」と。段善本は皇帝に申し上げるに、「ひとまず康崑崙を楽器から十年ほど遠ざけ、その本領を忘れさせてからなら、教えることができます」と。皇帝は詔を出してこれをお許しになった。その後、康崑崙は段善本の藝を尽く自分のものとしたのであった。

もともとこの催しを企画したのは皇帝徳宗であり、その結果、勝者は宮中に召し出された。ここで注目されるのは、段が崑崙の琵琶を聴いて、そこから芸筋を見抜いたこと。さらには、自分の芸を学びたければ、琵琶から10年離れて、これまで身に備わった技術や癖を忘れなければならないという、琵琶修得の厳しさが描かれていることである。藤原貞敏が琵琶を学んだ9世紀前半、中国琵琶はすでに技術的にも高度な成熟期を迎えていたと言えよう。

さて、この『楽府雜錄』を書いた段安節は、音楽に精通していたと『新唐書』巻89や、『唐語林』巻2にもみえる。そしてこうした逸話を記した理由が、『楽府雜錄』の自序にみえる。

世の中が乱れて、礼楽をつかさどる太常寺は頹廢し、雅楽の楽器を掛ける道具もどこかに持ち去られ、警鼓もどれかもわからない状態になってしまいました。梨園の楽人たちも、半ばはすでに梨園から離れ、楽府の歌詞・楽章もみな失われたのです。わたくし(段安節)は、幼少のころから音楽が好きで、それゆえに何とか音階は心得ており、また音楽文化について見聞きすることも多く、これをよく記憶しております。いつぞや『教坊記』を見ましたが、詳しく丁寧に記したものではないようですから、わたくし自身の知るところを記して『楽府雜錄』一卷をこしらえました。

唐代中期に安史の乱の後つくられた『教坊記』と、唐末の黄巢の乱の後につくられた『楽府雜錄』、その制作意図は、乱によって崩壊してしまった音楽文化を記録しておこうという点で共通していた。ただ、段安節は「琵琶録」という本を作ったとされ(『玉海』巻110に引く『中興書目』)、『楽府雜錄』でも琵琶についての記述に多くの紙面を費やしている。江戸の音を三味線だとなると、琵琶は、唐代長安の音であったと言えるかもしれない。

今回から、アンテベラム期にブラジルへ渡航した2人目の宣教師、ジェームズ・クーリー・フレッチャー (James Cooley Fletcher) を取り上げる。彼は長老派 (プレスビテリアン) の宣教師として、1852年から1869年にかけて計5回ブラジルを訪れ、その旅の一部をダニエル・バリッシュ・キダーとともに *Brazil and the Brazilians: Portrayed in Historical and Descriptive Sketches* (1857年) としてまとめている。

同書は、「ブラジル性」「混血国民論」「インディオの習俗・神話」など、ブラジルの特殊性について論じている。加えて、それらの特殊性に接合されるポルトガル植民者の宗教や民族的特徴に着目するとともに、ブラジル社会の歴史や社会のあり方、そこで展開された経済活動についても詳細に論じている。さらに、当時の南米唯一の立憲君主国であったブラジルの政治的重要性にも目を向けており、フレッチャー自身も皇帝ドン・ペドロ2世 (在位: 1831～1889) と親交を深めた。そのため、彼は皇帝の「ニューイングランドの知友」の1人であったともいわれている⁽¹⁾。

すでに2025年10号で述べたように、*Brazil and the Brazilians* は、しばしばキダーの *Sketches of Residence and Travels in Brazil* (1845年) と並び、米国においてブラジルを紹介した最も古い書物の一つとして知られ、ブラジル学の先駆的著作として位置づけられている。フレッチャーは、宣教師としての役割を担いつつ、米国人とブラジル人との文化的差異を前提に、その両者を架橋する社会関係の構築を模索した。彼の試みは、宣教活動を進めるうえで、交渉のプロセスとして現地の「宗教文化」に照準を合わせることの重要性を示している。*Brazil and the Brazilians* には、こうした文化的な齟齬や緊張関係のなかに、ブラジル社会とその文化を理解するための重要な手掛かりが含まれているのである。

しかし、このようなフレッチャーの功績にもかかわらず、彼はキダーとは対照的に、ブラジルではあまり知られていない。ブラジル宗教史を専門とするブルーノ・ゴンサウヴェス・ホージ (Bruno Gonçalves Rosi) によれば、プロテスタント教会の歴史書やそれに関連する学術論文のみならず、2009年に開催されたブラジル長老派教会 (Igreja Presbiteriana do Brasil) の創立150周年記念式典においても、彼への言及はほとんど見られなかったという。そして、そのことを踏まえ、フレッチャーに関するより詳細な分析と発信の必要性を主張している。そうした観点から、本連載では彼に関する記述を通じて、多少なりともその「必要性」に応えたい。フレッチャーの生い立ちと家庭環境

まず、フレッチャーの生い立ちと家族について見ていくことにしよう。

彼は1823年4月15日、11人兄弟姉妹の長男として、米国インディアナ州インディアナポリスに生まれた。父はカルヴィン・フレッチャー、母はサラ・ヒルである。カルヴィンは州上院議員、弁護士、実業家、農場経営者として活動し、地元を代表する名士であった。1821年、カルヴィンとサラはインディアナポリスへ移住し、まもなくカルヴィンはマリオン郡の検察官に選出された。さらに1834年には州法銀行の理事および公債償還基金の委員に任命され、トーマス・シャープと共同で「フレッチャー・アンド・シャープ銀行」を設立するなど、カルヴィ

ンは地域の有力者としての地位を確立した。フレッチャーは、そのような恵まれた家庭環境のなかで育った。

カルヴィンは敬虔なメソジストであったが、「第一次大覚醒運動 (First Great Awakening)⁽³⁾」の影響を強く受け、教派の枠を超えてさまざまな教会や超教派団体の活動にも積極的に参加していた。とりわけ、そのリバイバル精神はフレッチャーや彼の兄弟姉妹にも大きな影響を与えた。実際、フレッチャーがのちに長老派の宣教師となったのとはほぼ同じ頃、弟のイライジャはメソジスト派の牧師となっている。

若きフレッチャーは、地元の学校を卒業したのち、東海岸のニューハンプシャー州へ移り住み、フィリップス・アカデミーを経て、ロードアイランド州のブラウン大学に進学した。その後、1847年、24歳で宣教師となることを決意し、プリンストン神学校 (Princeton Theological Seminary) に入学した。そこで、当時の代表的なカルヴァン主義神学者であったアーチボルド・アレクサンダー、サミュエル・ミラー、チャールズ・ホッジらに師事した。ヨーロッパ留学とブラジル派遣

1849年、フレッチャーはカリブ海のハイチでの宣教活動を志し、フランス語を習得するためヨーロッパへ渡った。パリとジュネーヴで学業を続け、とりわけジュネーヴでは、当時、米国でも宗教改革史研究によって令名を馳せていたジャン・アンリ・メルル・ドービニエのもとで学んだ。そこで彼は、キリスト教による教化、法・道徳・慣習による社会統制、さらには思弁的学問や論理など、西欧キリスト教文明を特徴づける諸要素について学び、その歴史的展開への理解を深めた。この経験は、のちに自然崇拜をはじめとするブラジル先住民の宗教文化を観察・考察する際の重要な視座となったと考えられている。

また、パリではフランスを代表する政治思想家アレクシス・ド・トクヴィルと面会したほか、同地で開催された国際平和会議 (International Peace Congress) には、ニューヨークの新聞 *Observer* の特派員として参加した。さらに、留学中にはジュネーヴのカルヴァン主義神学者セザール・マランの娘ヘンリエットと結婚し、1850年に夫妻で米国へ帰国した。

帰国後まもなく、フレッチャーはインディアナ州の長老派教会によって牧師に任命された。そして1851年、「内外キリスト教連合 (American and Foreign Christian Union)」ならびに「アメリカ水上友愛会 (American Seamen's Friend Society)」の命を受け、翌1852年にリオデジャネイロへ派遣された。その主なミッションは、同市に居住するアメリカ人や、リオデジャネイロ港に寄港するアメリカ船の船員に対する牧会活動であった。

[註]

(1) Bruno Gonçalves Rosi. "James Cooley Fletcher, o missionário amigo do Brasil". In: *Almanack*. Guarulhos, n.05, p. 63, 1º semestre de 2013.

(2) Ibid., p. 63.

(3) 「第一次大覚醒運動」は、1730～1740年代の英領北米植民地で展開された宗教復興運動である。個人の回心体験を重視し、教派の枠を超えた巡回伝道が活発化したことで、諸教派間の協力や超教派的志向が顕著となり、後のアメリカ・プロテスタントの発展に大きな影響を与えた。

はじめに

天理教正代分教会長

茶木谷 吉信 Yoshinobu Chakitani

このたび、『グローバル天理』の貴重な誌面をお借りして、私の体験と、天理教における社会貢献のあり方について述べる機会をいただきましたことを、たいへんありがたく思います。本稿では、主に 2016 年熊本地震を取り上げ、その経験を通して考えた災害時の地域貢献について記してみたいと思います。

災害の現場は、常に混乱のただ中にあります。何が正解で、何が不正解なのかを一概に決めることはできません。熊本地震で私たちがとった行動について、今なお問題視される方がおられることも事実です。しかし一方で、私たち有志が動いたことによってたすかった命があり、届きにくかった支援を受けて、心身を癒やされた方々が多数おられたこともまた事実です。

大切なのは、たすけたいという意味を持つ人と、たすかりたいと願う人を、いかに迅速に、無駄なく結びつけるかということです。また、動ける人をどのように集め、どのようにお世話取りをしながら、怪我なく救援の場へ送り出すか。そこに災害救援の要点があるのではないかと思います。

毎年のように起こる災害は、それぞれに特殊性を持っており、同じものは一つとしてありません。だからこそ、災害の場で起こり得る出来事を、できるだけ多く、正確に記録として残し、共有し、次の対応に生かしていく必要があります。今回の原稿が、次に起こる災害支援活動に、いささかでも参考になれば幸いです。

熊本地震に至るまで

2016 年熊本地震について記す前に、触れておかなければならないことがあります。ボランティア元年といわれた 1995 年の阪神・淡路大震災と、2011 年の東日本大震災です。この 2 つの震災で、私が災害救援にいささかなりともかかわった経験が、熊本地震に向かう判断に少なからず影響を及ぼしました。

阪神・淡路大震災の際には、神戸市長田区で、倒壊した教会のがれき撤去と道路を開通させるひのきしんに参加しました。そこで見たのは、災害という特殊な環境で起こる混乱と矛盾でした。被災者用の簡易トイレがボランティアの使用で使えなくなったり、道路を開通させて喜んでいただけと思っていたところ、現地の町内会長から「どうして教会の周囲だけきれいにするんだ」と怒鳴られたりもしました。災害救援は、物資や食料を届けるだけでは不十分であり、心のケアが伴わなければ実を結ばないことを学びました。

東日本大震災では、災害救援ひのきしん隊の一員として、岩手、宮城両県に出動しました。津波の被害を受けた地域と受けなかった地域が、線で分けられたかのように隣り合う現場で、住民の方々の複雑な心理状態や、PTSD を負った子供たちが悲しみを心の無意識の奥にしまい込みながら、想像以上に明るくふるまう姿を目の当たりにしました。

私はそのころから、天理時報の「和楽」というコラムや『陽気』誌の連載などを通じて、少しずつ名前を憶えてくださる方が増えてきていました。SNS などでもつながりができた人たちの数が増え、何かを発信する機会にも恵まれつつありました。このことがあとで支援活動に大きな影響を及ぼすことになります。

2016 年熊本地震の発生

そうした経験を経て起きたのが、2016 年熊本地震でした。

4 月 14 日の地震が起きる少し前、私は修養科生の教養掛としておぢばに勤めていました。当時は、熊本県玉名市教育委員や高校の PTA 会長なども務めており、14 日の自教会月次祭前後に九州へ帰省したときに、行政や学校の用事を入れていただいていた。

月次祭と PTA の会計監査業務を終え、慰労を兼ねた懇親会から帰宅して入浴している時、突然、大きな揺れを感じました。時刻は午後 9 時半くらいでした。最初は湯船のお湯がさざ波を打ち始め、「地震だ」と思ったのもつかの間、大きな横揺れが長く続き、湯船のお湯がざあっと縁を越しました。

すぐに長女がお風呂の扉を開け、「逃げるよ」と言いました。ちょうど頭を洗っていた私は、「これを洗い流してから」と答え、急いで泡を流し、体をふいて着替えしました。しかし玄関に出たときには、家族はどこにもいませんでした。

自教会は海岸から 800 メートルほどしか離れておらず、津波の恐れがありました。「津波でんでんこ」の格言通り、誰かを待つのではなく、逃げられる人から逃げる。家族の行動は実に正しいものでした。私は自家用車で高台へ注意深く避難しました。

当時の常識として「本震より大きな余震はない」と言われていました。ひっきりなしに起こる余震におびえつつも、しばらくして家族と連絡を取り合い、自宅に戻りました。長男は結局、一晩中車中泊で過ごしました。

幸い停電はしていませんでしたので、テレビで被害状況を確認しながら、SNS で心配してくださる仲間返信しつつ、一晩を過ごしました。余震の回数は後に 4,400 回を超えることになりますが、そのすさまじさは今でも忘れられません。

集めた情報を見る限り、大きな被害はあったものの、自分がすぐに活動を始めるほど切迫した雰囲気ではないと感じていました。話所に残してきた修養科生の方々のことも気になり、翌日、予定通りフェリーで教養掛に帰任することにしたのです。

ところがフェリーのベッドで寝ていた夜中 1 時半ごろ、同じ部内の会長さんから携帯に電話がありました。

「揺れたやろう？ 大丈夫か」

寝ぼけていた私は、

「いや、瀬戸内海はべたなぎで揺れてません」

と答えました。すると、

「ばかやろう、テレビをつけろ」

と言われました。

ロビーに出ると、すでに黒山の人だかりができていました。モニターには、夜間でしたが震度 7 の揺れが引き起こしたすさまじい被害の様子が映し出されていました。作業服姿の気象庁の担当者は、これが「本震」であり、前日の揺れは「前震」であったと解説していました。

「あ、これは着いたらすぐに引き返さねばならないな」。ぼうっとした頭で、そう考えていました。



震災直後の被災地の様子（筆者撮影）

第2講：異文化伝道論 1—イスラームの宣教活動に学ぶ

天理大学人文学部准教授

澤井 真 Makoto Sawai

天理教とイスラームの歴史的交錯

天理教とイスラームの邂逅についての公式の記録として、1926（大正 15）年の中国巡教における中山正善 2 代真柱によるモスク（清真寺）訪問がある。日本で最初に建設された神戸モスクが、1935 年の建設であったことを踏まえば、2 代真柱は日本国内に暮らす天理教の信仰者に先駆けていち早くイスラームを体感し、その信仰生活について詳細に学ぶ機会を得ていたことがわかる。2 代真柱はその後、1943（昭和 18）年に「海外伝道に関する後方の参謀機関」としての役割を期待し、天理教亜細亜文化研究所（現・おやさと研究所）を創設された。

インドネシア布教にみるイスラームとの軋轢

第 2 次世界大戦以前の南方布教（インドネシア布教）は、瓶田スカによるジャワ島教会の設立に代表されるように積極的に布教が行われた。しかしながら、大戦の勃発と敗戦を機に、東南アジアにおける布教の歩みは一旦途絶を余儀なくされた。

戦後、「論達第二号」の発布を受けて天理大学は建学の精神に立ち返り、伝道課程の開設や海外伝道同志会の結成など、海外布教の人材育成に活気づいた。その後のインドネシア布教の歩みから、イスラーム圏での布教の実態を窺い知ることができる。

天理大学を卒業後、天理教海外布教伝道部（現・海外部）で勤務した谷口忠三の回顧によると、U 氏は第 2 次世界大戦後にインドネシア独立戦争に参加、その後も日本に戻らず現地に定着した。日本に一時帰国して修養科で学んだ後、インドネシアへ戻りスマトラ島で診療所を開設、教えを聞き分けた方に対しておさづけの理を取り次ぐなど布教を展開した。一方、現地出身の妻は周囲からの迫害を恐れ、毎月の講社祭では、おつとめが始まると、隣室でラジオのボリュームを上げておつとめの声をかき消そうとしたという。

現地の熱心なムスリム家庭に下宿した谷口は、生活すべてに密着したイスラームへの伝道の至難さを体験した。たとえば、谷口を見かけるとすぐにお道の教理について尋ねてくるムスリムがいたが、自らの天理教の教理の理解不足やイスラームの知識不足から、「教義論争に敗北を喫する」ことが多かった。こうした経験を経て、谷口はイスラームが常に他宗教とのディベートで優位に立つ努力を重ねてきたことを体感した。同時に、彼は世界宗教として、天理教の神観、人間観、世界観、救済論について、信仰者自身が教理の研鑽を主体的に行う必要性を痛感した。

イスラームにおける「^{ダアワ}宣教」の概念と歴史的展開

イスラームにおける宣教は、アラビア語で「招くこと、呼びかけること」を意味する「ダアワ」（da'wah）の概念に基づく。聖典クルアーンにおいて、非ムスリムに信仰を呼びかける行為はムスリムの信仰的義務とされる。クルアーンには「英知と良い話し方で、あなたの主の道に招け」（16 章 125 節）など、神の道や善へと向かうよう呼びかける言葉が頻出する。

歴史的には「コーランか剣か」という過酷な二者択一の側面も確かに存在したが、実際には人頭税（ジズヤ）を納めれば庇護民（ズィンミー）として一定の信仰の継続が認められた。また、

近代以前に組織的な宣教団体が遠方へ派遣された事例はほとんどなく、東南アジア等への拡大には、主としてムスリム商人や移住者の交易・交流、そして神秘主義の修道団（タリーカ）の活動を通じた現地化・土着化のプロセスがあった。その際、現地の風習（アダト）と宗教的行為（ディーン）を区別し、固有の習慣といかに折り合いをつけるかという、軋轢のなかでの融和の模索が常に続けられてきた。

宣教の縦と横—イスラームの結婚と宗教教育—

イスラームは信仰継承の仕組みを完全にシステム化している。現在、世界のムスリム人口は約 19 億人に達し、高い出生率による自然増だけでなく、結婚・出産に伴う改宗・入信もまたムスリム人口の増加を支えている。イスラーム法に基づき、ムスリム男性はユダヤ教やキリスト教といった一神教の女性との結婚は可能であるが、その逆は認められていない。また非ムスリム男性がムスリム女性と結婚する場合は、イスラームへの改宗が必須となる。さらに、生まれてくる子供は自動的に「父の宗教」を受け継ぐものとされ、法的・システムのムスリムとして登録される。このように、家庭・地域・学校を通じた強固な宗教教育の仕組みにより、他宗教への改宗は事実上選択肢にない。

シンガポールのように、民事婚（ROM）とムスリム婚（ROMM）を法律上区別し、非ムスリムが改宗せず結婚することを例外的に認める国もあるが、統計を見ても、非ムスリム側が改宗するケースが大多数を占める。逆にイスラームからの改宗には家族との絶縁や身の危険が伴うこともある。そのため、そうした改宗者を迎え入れる宗教団体側は親族や家族には知られない物理的状況（空間）を作り出すとともに、世代（時間）をかけて受け入れていく体制が求められる。

「をや」を知らせる天理教学の展望

クルアーンには、「アッラーは、自存され、御産みなさらないし、御産れになられたのではない。」（112 章 2～3 節）と記されており、神と人間の間を「をやと子」として説くことは決してない。これは、人間を我が子として救済し導こうとされる親神天理王命の神観とは決定的に異なる。

イスラームを唯一絶対の真理と信じ、他宗教に真理を認めないムスリムのような強固な信仰世界を持つ相手に対し、信仰者自身が醸し出す雰囲気や情緒的なアプローチだけでは教えは伝わらない。彼らと対話し、お道を伝えていくためには、自らの教えをさらに深く掘り下げ、論理的に説明できる確固たる「教理の深化」が必要となる。

さらに、他宗教との邂逅や対話を通じて得られる知見を吸収しながら、現代社会において展開する広い意味での天理教学（天理教教義学）を構築していくことが、今まさに求められている。この意味で、おやさと研究所は、「後方の参謀機関」としての枠組みを超えて、教えの体系的整備とさらなる掘り下げを行う唯一無二の機関として、これからの異文化伝道において極めて重要な役割を担っている。

第 387 回研究報告会 (2026 年 5 月 14 日)

「意味が重複する表現」

蜂矢 真弓 (天理大学人文学部准教授)

現代日本語において、意味が重複する表現が発生する際に一番多く見られるのは、同じ意味を表す音読みと訓読みが混在する場合である。これは、表記上では意味が重複していることが分かるが、口頭では音読みと訓読みとで異なるため、意味が重複していることに気付かずに発生してしまうものと考えられる。

一方、古代日本語、或いは、古代から現代の日本語において、意味が重複する表現が発生するのは、次の 3 種である。①同じ意味を表す二語のうち片方が一音節語である場合、②一音節語の同音衝突回避のために多音節化した場合、③被覆形・露出形の両形が含まれている場合である。

まず、①は一音節語の方の語彙が形骸化した結果、②は同音衝突回避のうちの 1 つの方法である別の多音節語に置き換えるという方法を取ることによって形骸化した結果、③は被覆形・露出形の両形を持つ被覆形が複合語内に形骸化した結果、それぞれ意味が重複する表現が発生してしまったものと考えられる。

第 388 回研究報告会 (2026 年 6 月 29 日)

「神道本局時代の天理教についての歴史的考察—教会公認運動と一派独立の決意に至るまで—」

金子 昭

天理教は、明治 21 年に神道本局直轄教会になり、これによって念願の布教公認・教会公認を果すことができた。明治 41 年には一派独立して、教派神道十三派中の一派となる。天理教はその後も昭和 45 年に教派神道連合会を退会するまで、公的には「神道」の一派としての存在を 82 年間も続けていくことになるのである。本発表は、私が一連の天理教史研究の中で行っているもので、今回はとくに神道本局傘下の時代 (明治 21 ～ 41 年) を取り上げ、天理教の「神道化」の初期過程を考察した。

天理教の「神道本局」時代の重要性は、「おさしづ」時代がほぼ全てここに入ること、そして中山眞之亮初代真柱の青壮年時代の主要部分が全て入ることだ。この時代は、本席による「おさしづ」の精神的・信仰的指導と、初代真柱 (教長) による教団行政的指導との両輪体制の下で、内的にも外的にもダイナミックな展開を見せた時期である。

明治初年の神道国教化政策の時期とは異なり、この時代は同じ国家神道体制であっても、宗教教派としての「神道」の地位はすっかり低下していた。ただ、神道本局 (正式名称は単に神道) は維新当時から継承 (かつての大教院) によるもので、天理教が布教公認のため、この傘下に入る主たる理由もここにあった。そして、それによって、「かぐらづとめ」が初めて官憲の目を恐れずに勤修できるようになった。明治

21 年に天理教は「神道天理教会規約」を定めたが、それは神道本局の祭神を奉戴し、三条の教憲を遵奉するなど、教規上も天理教の「神道」化を進める内容であった。だが、それは「応法の道」以外の何物でもなかった。そのため、「おさしづ」にもしばしば手厳しい表現が見られ、これに対して警戒を促しているのである。

教理的にも相矛盾するものを抱えながら、天理教は“神道・天理教会”として信仰生活の二重構造を強いられ、苦渋の道を歩まざるをえなかった。神道本局との関係においても、天理教は神道本局傘下随一の巨大教会として、経済的に神道本局を支えることになる。天理教側としては、経済的負担は、布教公認・教会公認を得るためのいわば代償だった側面がある。こういう中から、一派独立への機運も高まってくるのである。



研究報告会の様子

連載執筆のねらいと執筆者紹介

「熊本地震と私—災害支援に学んだこと」

茶木谷 吉信 (天理教正代分教会長)

我が国では、毎年どこかで災害が発生する。海水温の上昇や地殻変動の活発化などが原因とされているが、「まさか私が被災するとは」との声が等しく被災地から聞かれる。

その中、天理教のようばくは常日頃からたすけ心の涵養を心がけているせいか、被災地支援に対する関心が高く、行動力も一般人に比べて群を抜いているように見受けられる。

こうした天理教信者の地域に貢献したいという思いに対し、いかにすれば支援を必要とする人と繋げられるのか、どのような準備をすれば「せかい」の困りごとに対応できるか、ささやかな体験をもとに考察してみた。今後の災害支援活動の何らかの参考に資するならば、望外の喜びである。

茶木谷吉信 (ちゃきたに よしのぶ)

1960 年熊本県菊池市生まれ。1983 年熊本大学文学部哲学科卒。1984 年天理教正代分教会長。2023 年大江大教会布教部長。認定心理士。玉名市主任児童委員。熊本刑務所教誨師。(株) 養徳社社外取締役。著書に『世界たすけに活かすおやさまご逸話』(養徳社)『心に吹く風』(道友社)がある。

2026 年度おやさと研究所 公開教学講座 「布教伝道と伝道学」

第1回	4月25日(土)	伝道学入門—丸川仁夫『伝道学概論』から考える	堀内みどり 主任(終了)
第2回	5月25日(月)	異文化伝道論1—イスラームの宣教活動に学ぶ	澤井 真 研究員(終了)
第3回	6月25日(木)	異文化伝道論2—コンゴでの伝道とその課題	森 洋明 研究員(終了)
第4回	7月25日(土)	異文化伝道論3—ブラジルから日本へ：在日ブラジル人の布教	中西光一 研究員
第5回	9月25日(金)	伝道史の探究1—明治時代における教会設置	澤井治郎 研究員
第6回	10月25日(日)	伝道史の探究2—戦前・戦中の北米伝道	尾上貴行 研究員
第7回	11月25日(水)	伝道史の探究3—『天理教伝道者に関する調査』を読む	岡田正彦 研究員
第8回	12月25日(金)	伝道学の展開1—天理大学史の中の「宗教学科」	島田勝巳 研究員
第9回	1月25日(月)	伝道学の展開2—時代の動きと道の「時句」	金子 昭 研究員
第10回	2月25日(木)	伝道学の展開3—帝国時代とポスト帝国時代の海外布教戦略	井上昭洋 所長

日時：毎月25日 13:00～15:00

会場：天理大学研究棟3階 第1会議室

事前申し込みは不要です。
直接会場にお越しください。

※但し、第10回(2月)はふるさと会館大ホール(九号棟)

グローバル天理

第27巻 第8号 (通巻320号)

2026年(令和8年)8月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 井上昭洋

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

おやさと研究所 (HP)



印刷 天理時報社

Printed in Japan